

I 学校の概要

思考力等の育成モデル校事業 高松市立屋島中学校

◆生徒数及び教員数

○生徒数（平成 30 年 5 月 1 日現在）

第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	特別支援	全 校
5 学級 1 6 6 名	5 学級 1 7 0 名	4 学級 1 5 5 名	3 学級 1 5 名	1 7 学級 5 0 6 名

○教員数 3 3 名

◆学校の特色

本校は高松市東部に位置し、ベッドタウンとして発展していたが、近年は少子高齢化の影響を受け、人口は減少傾向にある。

地域は学校に協力的であるが、接続する小学校を取り巻く環境は多様であり、家庭環境等に課題を抱える生徒や基礎学力が十分に身に付いていない生徒も増えてきている。学力面では、二極化が顕著に見られ、情意面においても、自己肯定感の格差が大きく、これらの改善を図ることが課題となっている。

II 研究主題等

研究主題

主体的な学びを育てる わかる授業の創造
～ 思考力・判断力・表現力を育む活動型授業を通して ～

◆研究主題設定の理由

平成 28 年度の全国学力・学習状況調査や香川県学習状況調査においては、ほとんどの教科で県平均との比較において課題が見られた。また、香川県学習状況調査の質問紙調査では、学習に関する一般的な質問の多くが県平均と同レベルであったが、話し合い活動に関する質問においては、県平均を下回る状況が見られた。

このような状況を踏まえ、平成 29 年度より学力向上モデル校事業の指定を受け、主体的な学びを目的とした活動型授業を展開し、思考力・判断力・表現力を育み、確かな学力の向上を目指す学習指導の改善に取り組んできたところである。

現 3 年生の県学習状況調査の経年変化を見ると、平成 29 年度は数学を中心に改善傾向が見られ、すべての教科で県平均を上回るなど、学力の向上に一定の成果が見られたほか、質問紙調査においても、話し合い活動に関する質問で改善の傾向が見られた。

今年度は、生徒の学びが、より「主体的・対話的で深い学び」に向かうよう、「活動し考える」場面や「活動し表現する」場面を、生徒の「特徴的なエラー」に照らし合わせて設定したり、国や県の調査結果をもとに、各教員が自身の指導を振り返ったりするなど、より目の前の生徒の実態に「アジャスト」した授業改善に取り組むこととした。

◆研究内容及び方法

研究内容については、県学習状況調査をはじめとする各種調査や、日々の学習指導等をもとに、本校生徒の実態・課題を多面的に捉えた上で、活動型授業を通して、基礎・基本の定着を図り、思考力・判断力・表現力の育成を目指すこととした。

全教科共通で取り組む視点は、次の通りである。

- (1) 「計算力」「書く力」の向上を重視した常時指導を工夫する。
- (2) 土曜朝塾や毎週水曜日放課後に行う個別補充学習マイスタディ、マイスタディ・プラスの取組を通して、思考力・判断力・表現力の育成を支える基礎・基本の定着を図る。
- (3) 「活動し考える」「活動し表現する」活動型授業を実践する。
- (4) 思考力・判断力・表現力の育成を目指した単元構成のデザイン化を推進する。

また、研究を進めるに当たっては、学習状況調査等の経年分析をもとに「特徴的なエラー」を把握し、そこに焦点を当てて活動型授業に取り組むことを課題とした。

さらに、指導改善のポイントとして「さぬきの授業 基礎・基本」、「特別支援教育の視点を取り入れた授業自己チェックリスト」をはじめとするUDの視点なども参考に、活動型授業との関わりから見直しを進めることとした。

Ⅲ 研究実践

◆日々の授業での取組

学習目標の提示や授業終末の振り返りを約束事として取り組むことにした。また、昨年に引き続き、まずは話し合い活動を取り入れることを課題とした。

付箋やホワイトボードを使った話し合い活動は多くの教科で設定された。



◆「特徴的なエラー」に視点を当てた取組

全国学力・学習状況調査や県学習状況調査において、簡単な問題であっても、同じくらの割合の生徒が間違い続けているという「特徴的なエラー」に視点を当て、そこに活動型の授業を設定し、エラーの改善に取り組んだ。

例えば、数学では、設問に合う反比例のグラフを選ぶ問題（図1）が複数年出題されているが、正しいグラフを選んだ生徒は平成24年度が53.2%、平成27年度が58.1%であり、ウのグラフを選ぶ生徒が例年25%以上みられたことから、「特徴的なエラー」の一つと考え、その改善に取り組んだ。

今年度、2年生を対象に、1年生の復習として、「なぜ、ウのグラフは誤りなのか」について考える活動型授業を設定した。また指導の効果を確認するために、定期テストに評価テストと同じ趣旨の問題を盛り込んだ。

このような「特徴的なエラー」については、調査の無い教科においても、普段の授業の中で経験的に「特徴的なエラー」と捉えられるものも含めて設定することにした。調査の無い教科では、「特徴的なエラー」に対する教員の認識が低かったことから、今後ともこの視点での指導評価が必要であり、「活動型授業」の重要な視点の一つとして、取り組みたい。

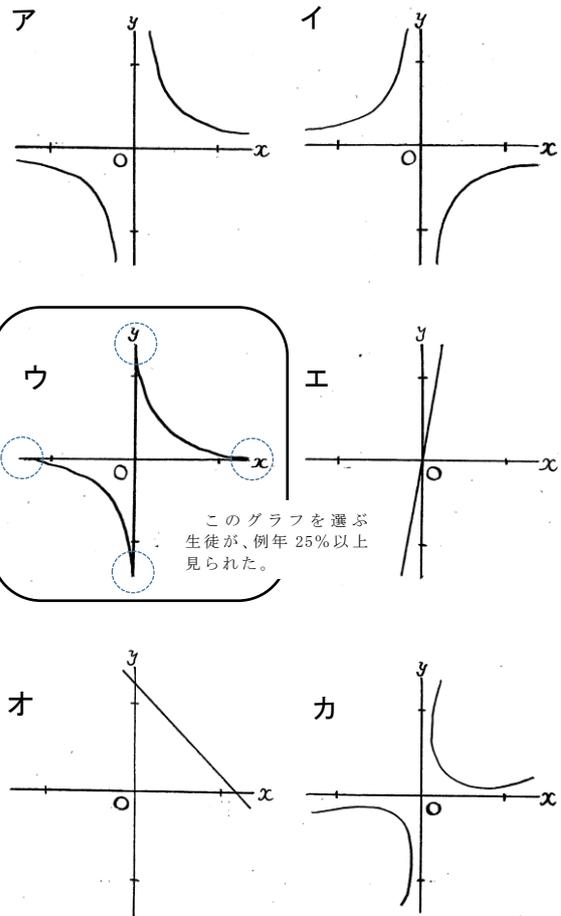


図1 設問に合う反比例のグラフを選ぶ問題

◆「活動型授業」の質的向上をめざして

今年度は、活動型授業を設定する場面の検討と、活動そのものの質的な改善に取り組んでいるところである。研究授業等を通して、指導主事から話し合い活動の構成、課題の設定、方法等改善策の具体について指導・助言を受けたことは、今後の指導改善につながる情報として有益であった。

なお、今年度、生徒の実態を把握するために実施した調査は次の通りである。

- 全国学力・学習状況調査（4月、3年悉皆）
- 香川県学力・学習状況調査（11月、1・2年悉皆）
- 本校調査（7月・11月・1月、全学年悉皆）
- リーディングスキルテスト〈国立情報学研究所のものを抜粋〉（10月、全学年悉皆）
- 資質・能力に関するアンケート調査〈附属高松中学校の研究協力〉（12月、全学年悉皆）

以下は、県学習状況調査及び本校調査の結果である。

4 (県学習状況調査) 普段の授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていると思いますか。

指標 肯定的な回答（「そう思う」＋「どちらかと言えばそう思う」）の合計



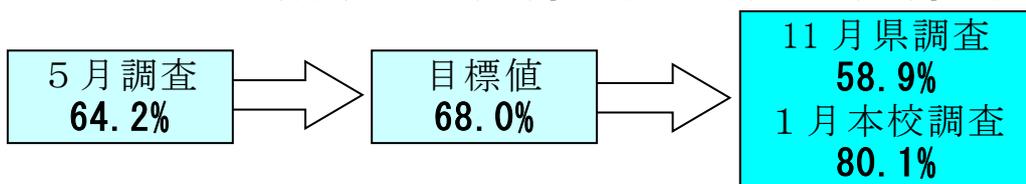
7 (本校調査) あなたは、自ら学ぶ姿勢をもって学習に取り組んでいる。

指標 肯定的な回答（「取り組んでいる」＋「どちらかと言えば取り組んでいる」）の合計



1 (県学習状況調査) 授業の内容がどの程度分かりますか。
(本校調査) 授業中、「できた」「わかった」と思うことがよくある。

指標 肯定的な回答の合計（学習状況調査は「よく分かる」＋「だいたい分かる」の合計）
（本校調査は「そう思う」＋「どちらかと言えばそう思う」の合計）



5 (県学習状況調査・本校調査) 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか。

指標 肯定的な回答の合計（「できている」＋「だいたいできている」の合計）

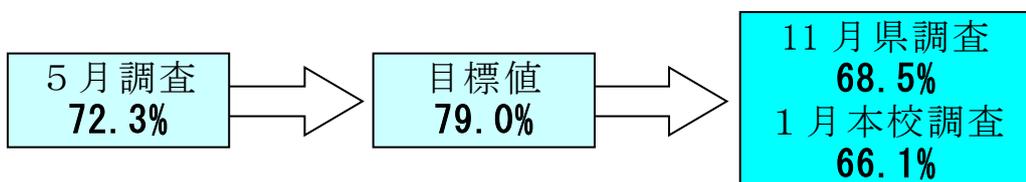


図2は英語科の実践である。グループで作成した英作文を、代表グループが学級全体に紹介する活動場面である。このような活動を苦手とする生徒も見られるが、全体的には、意欲喚起につながっていると受け止めている。

ただ、特定のグループ、上位の生徒の発表に終わることのないよう、留意する必要がある。

時間確保の問題もあるが、今後はこのような活動が下位の生徒の学力向上に結び付くよう指導を工夫したい。

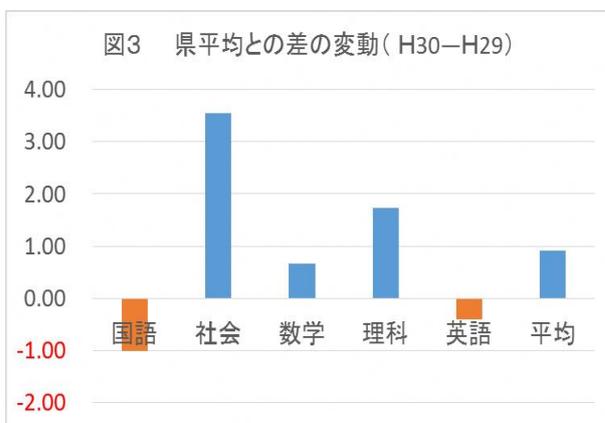


図2 グループで話し合っ作成した作文を紹介する活動（英語科）

図3は現2年生の、県学習状況調査における県平均との差を示したものである。社会・数学・理科で改善が伺えるが、これはすべての教科で授業目標の提示や振り返りの実践、話し合い活動の日常的な取組を意識してきたことの成果である捉えている。

また指標7から、自ら学ぶ姿勢をもって学習に取り組もうとする生徒は増えていると捉えているが、指標1のように、授業理解に関する意識は調査によって大きなばらつきが見られる状況である。

引き続き、生徒が「分かる」「できる」と確かに実感できるよう、授業改善に取り組む必要がある。



IV 研究の成果と課題

研究2年目に入り、教員においては目標の提示や話し合い活動への取り組みに対する意識は徐々に改善されており、生徒においても学習に真摯に向き合おうとする雰囲気醸成されてきている。

現状において、一部の教科では、学力の向上が認められたものの、話し合い活動が生徒の学習意欲等の改善に十分効果があったとは言えないことから、今後とも、目の前の生徒が「分かる」「できる」としっかり自覚できるよう、授業改善に取り組む必要がある。

また、国や県の学習状況調査の結果にもっと目を向けるとともに、「資質・能力に関するアンケート調査」(12月、各学年悉皆)において、「新しいことを始めても、出だしでつまずくと、すぐあきらめてしまう」ことに「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答した生徒の割合が、各学年40%以上であったことや、リーディングスキルテストの結果にも留意し、「特徴的なエラー」の改善など、より生徒の実態に「アジャスト」した指導がなされるよう、授業改善を図りたい。

今後とも、話し合い活動等が学力向上の道具として日常的に授業に位置付け、それによって学力と学習意欲の双方が高まった生徒の姿を目指して研究実践に努めたい。